
日本人中医診療記

その2

天津中医薬大学 柴山周乃



3月11日に発生した東日本大震災に深く心を痛めております。地震により被害を受けられた皆さまに、心からお見舞い申し上げます。その頃、中国は全国人民代表大会（全人代）の最中でしたが、テレビでもかなりの時間を割き、隣国日本で発生した未曾有の大災害を報道していました。病院の先生方、患者様、大学関係者の方々からたくさんお見舞いの言葉をいただきました。美しい我が祖国日本の、一日も早い復旧・復興をお祈りしております。

日本は今頃、花粉症の季節。昨夏の猛暑の影響で、今年の花粉飛散量は例年の5倍とか。花粉症の方にとり、GW頃までとてもつらい日々と思います。

こちら天津では花粉は飛んでいませんが、黄砂の季節です。アレルギー体質の私はすでに目が充血し痒く、例年の如く天津中医薬大学・第一付属病院製剤「梔黄滴眼液」（梔子・大黄などの成分の目薬）のお世話になっています。ちなみに、こちらでは「黄砂」と言っても通じず「沙尘」「黄尘」または「黄沙」と言われています。4月中頃からは黄砂に替わり柳絮が舞い始め、しばらく私は“忍”の一字

です。柳絮のことを「雪が降っているようできれい」と表現する方もいますが、やはり柳絮は「遠くにありてめでるもの」と思います。

2011年が明け、1月中旬に北京で「2011年全国伝統中国医学ワーキンググループ会議」が開催されました。会議のなかで、“十二五”（第12次5カ年計画）に挙げられている「中医薬事業発展のための主要9項目」が示されました。その一つに、中医薬学校の教育改革の推進、よりハイレベルな人材育成が挙げられています。3月中旬に張伯礼学長と「中国中医科学院リーダー会議」に出席しましたが、その会議のなかでも斬新なアイデアをもつ人材、国際的な人材育成が挙げられていました。

今回は中国における中医教育の現状、並びに問題点をご紹介します。現代の中医教育は1950年代中頃から始まり、半世紀に渡り絶え間なく発展してきました。中医学は中医薬大学のほか、民間中医（主に徒弟伝授式・家伝式・独学式・学術交流式・文化講座式など）、また継続教育を利用して学ぶことができます。

現在、中国全国に23校、ほとんどの省に中医薬大学（または学院）があります。香港・マカオの特別行政区の中医薬大学、藏医（チベット医学）、蒙医（モンゴル医学）、維医（新疆ウイグル医学）などの民族医学の中医薬大学を合わせると30校以上にのぼります。中医薬大学には医学部のほかに理学部・文学部・管理学部等の学部を置いているところもあります。また、天津中医薬大学を例にとると、医学部には中医学科・針灸推拿学科・中薬学科・中西医臨床学科・古書文献学科などの専攻学科があります。修学年限は大学学部

中医薬大学で使用される
各種教科書



張伯礼学長（右端）の
診療に立ち会う筆者（中央）

5年・修士課程3年・博士課程3年・博士後期2年となっています。
また学士・修士学位を7年で履修する7年制学部もあります。

中医薬大学では、中医学のほかに西洋医学（生物化学、病理学、薬理学、組織・胎生学等）も履修、中医学と西洋医学の科目比率は6:4（学校によっては7:3）となっています。中医教育の方式ですが、最近どの中医薬大学でも学生の自主学習能力アップに力を入れており、医案応用方式、討論会方式、PBL教育（問題立脚型学習）を取り入れる学校も増えてきました。4年間で規定の科目を履修後、5年生の1年間は病院実習をし、学士論文発表、筆記（中医・西洋医学）と臨床技能（病院の外来、または病棟で患者を診察、弁証論治シカルテ作成）の卒業試験合格を経て学士学位を取得することになります。

中華人民共和国・中醫師資格国家試験は年1度行われます。中医薬大学卒業後、医療または保健機関で1年以上の臨床経験を積んだ者に受験資格が与えられます。試験は一次、二次試験とあり、一次試験は実践技能試験：①カルテ作成（与えられた主訴、検査データをもとに弁証論治）、②基本診察・検査実技試験、③臨床口頭試問の3部から成り、一次試験合格後、二次の筆記試験に進みます。筆記試験では西洋医学の出題が5分の2を占め、少し問題視されており、また、中醫師のレベルアップを図るため、台湾の中醫師資格試験のように四大経典（黄帝内経・傷寒論・金匱要略・温病学）を受験科目として取り入れるべき、という声も上がっています。

最後に中医学が直面している問題について触れたいと思います。

1. 中医薬大学教育の西洋医学化：西洋医学教育モデルで学生を育成しているため、外国語修得重視、漢語古文軽視の傾向があり、学生の4大経典ほか、医古書の読解力低下が嘆かれています。また、西洋医学履修科目が増えたため、中医理論基礎訓練、中医四診（望・聞・問・切）訓練時間が絶対的に不足し、中医理論を用い診察ができない卒業生が増加しています。

2. 真の中医学伝承の危機：統計によると、今現在、中国全土で著名な老中医（中医スペシャリスト）の数は300人に満たないと言われています。また、その老中医達も高齢で、この先どのように真の中医学を伝承して行くかが大きな問題です。そんななか、昔の徒弟制度を見直す動きが広がっています。普通は、修士課程に進みはじめて一人の指導教官の指導の下、じっくり臨床研究を行います。5年生の1年間の病院実習にそれを取り入れる学校も出てきました。た

だ、この方法はたくさんの臨床経験を積むべき時期に、他の先生方の意見を聞いたり、弁証論治を見たりできないという難点があり、賛否両論です。私どもの学校もそうですが、1年生から指導教官について5年間しっかり学ぶ中医臨床伝承学科を設けている学校もあります。

3. 深刻な就職難：2006年、医学部卒業生の就職率は31.01%。なかでも中医学専攻の卒業生の就職率は、全ての学部の中なかで最下位から2番目という驚くべき低さでした。これは、需要が少ないということだけが原因ではなく、色々な要素が重なった結果と言われていいます。1999年に施行された「医師資格法」が一番大きなネックとなっています。西洋医卒業生は西洋医病院のほか、中医病院にも就職でき、かつ中医病院は西洋医卒業生を積極的に採用する傾向にあります。逆に、中医卒業生はその法律により中医病院、または西洋医学病院の中にある数少ない中医科にしか就職できません。今後、中医卒業生の人材需要増加が見込まれていますが、中医学教育の国の政策、体制、改革が滞っているというのが現状です。ただ、この問題は一朝一夕に解決するのは難しくまだ時間が必要のようです。昨夏一緒に博士課程を卒業した同級生の中なかにも未だ就職が決まらず、就活中の方が数人います。今年、修士課程卒業予定の後輩たちは必死になって就活中ですが、就職できなかったときのことを考え博士課程を受験する人もいるという不思議な現象が起きています。この先、中医薬学を取り巻く環境が徐々に変化するとされていますが、もう少しスピードアップすることを願ってやみません。



プロフィール

柴山周乃（しばやま・ちかの）

愛知県名古屋出身

1996年 日本航空株式会社・国際客室乗員部退社

1999年 天津中医学院（現天津中医薬大学）本科入学

2006年 中華人民共和国・中医医師資格取得

2010年7月 天津中医薬大学・中医内科学博士課程卒業

修士課程は天津中医薬大学第二付属病院・循環器内科杜武勳教授に師事、「糖尿病性心疾患の中医病機メカニズム及び臨床治療」を研究。

博士課程は天津中医薬大学・張伯礼学長に師事、「中医および漢方医学による心疾患・脳血管疾患治療」を研究。

現在は、引き続き張伯礼学長に師事し外来で診察および中国人学生の講義を担当。